
ある夏の日の出来事

詩乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある夏の日 の出来事

【Nコード】

N2341N

【作者名】

詩乃

【あらすじ】

ある夏の日、不審な非行生徒・杉並を風紀委員・美春が尾行。

とある夏。

休日の午後。

天枷美春は、商店街の一喫茶店内にいた。

立っているだけで汗を噴ける屋外とは対照的に、クーラーがガンガンに効いた店の中は寒いくらいである。

美春がそれに気付いたのは、まさにそんな時であった。

バナナのたっぷり入ったパフェ一杯を食べ終えた美春が、この後どうするか　　店を後にするか、もう一杯パフェを頂くか　　を

思案している時、彼女は店のガラス壁の向こうに杉並の姿を捉えた。

と、同時に美春は神妙な顔つきとなった。

もちろん、いくら風紀委員に所属し、正義に燃えまくる美春でも、杉並という人間がただ道を歩いていただけで、彼の動向を怪しむことはない。

しかし、今美春の目に映る杉並の格好は、脇には大きな茶封筒を抱え、口元には不敵な笑みを浮かべると言ったもので、それが美春の風紀委員としての勘を働かせるのである。

勘、即ち　　。

（杉並先輩、また何か悪行をしようとしてるんじゃない…ここは、ちょっと卑怯だけど、尾行して確かめる必要があるよね）

思い立ったが何とやら。

美春は即座に席を立ち、会計を済ませると、喫茶店の外に飛び出し

て行った。

ある夏の日 of 出来事

美春にとって、杉並を見つけたのが休日の商店街というのは、好都合だった。

ターゲットがこちらを見つけないことはなくとも、こちらがターゲットを見失うことはない。

尾行するには、商店街は丁度良い込み具合であった。

実際、杉並の様子をじつと窺っていた美春は、彼が信号など以外で立ち止まったり、後ろを振り返ったりするのを一度も見なかった。そんな訳で、いくらか余裕を持って、美春は杉並の尾行をしていたのだが、やがて住宅街に入るとそう安心してもしられなくなって来た。

商店街とは対に、住宅街の人口密度は極めて低い。

美春は電柱の影や、十字路にちよくちよく身を潜めながら、尾行することになった。

杉並の動向はなかなか掴めない。

もう二十分近く様子を見ているが、独り言の一つも口にしていないようだ。

十字路に隠れながら、美春は考える。

（杉並先輩、一体どこに行くんだろ…？）

杉並の行く先として、美春が思い至るのは一箇所しかない。
風見学園だ。

休日の学園に忍び込み、非公式新聞の仲間と、もしくは杉並一人で何か悪事を画策しようとするのではないだろうか。
美春はそう考える。

休日にも学園で活動する部活はあるし、出勤している職員もいる。
しかし、彼らから身を隠すことなど非公新聞部、杉並にとっては造作もないことである。

今まで風紀委員がしてきた慎重な警戒態勢と入念な罫を、いとも簡単に潜り抜けてきた非公式新聞部。

その要であろう杉並が、また何かをしでかそうとしているかもしれない。

そう思うと美春の心は更に緊張感を強める。

（これは一時も目を離せなくなってきたかも…）

決意を新たにする美春であったが、杉並の行く先はなかなか安定しない。

というのも、杉並はどこかある一点を目指しているわけではなく、いくつかの場所は何度も何度も通っているのである。

念入りに様子を見ているところもあれば、何にもせずに過ぎるところもある。

風見学園にも訪れたが、学園内には入らず、前を通り過ぎるだけに終わった。

先刻の美春の予想はハズレということになる。

ある一点を目指しているのではないのだから、どこかでの集まりや、誰かとの待ち合わせというわけではないだろう。

（もしかして…）

尾行中に尾行される側がすることのひとつ。

（杉並先輩は、美春をまこうとしてるんじゃない…でも）

その割に杉並は落ち着いている。

それにまくのならば、あちこち歩き回るよりも走った方が賢明であ

る。

運動の得意な男子と一般的な女子ならば、足の速さの差は明らかだ。杉並の目的は分からぬまま、時間だけが刻々と過ぎていった。

やがて西の空も橙に染まり始めた。

太陽の熱が横から叩き付けるように熱く感じる。

そんな時、杉並が立ち止まったのは、神社の前だった。

（神社？お参りでもするのかな…？）

そんなことはないだろう。

すぐに否定するが、杉並は石段を登り、境内の中に足を踏み入れていった。

隠れ場所が少ない分、より警戒心を強めるが、杉並が振り向く様子は無い。

境内には誰もいず、ただ橙の光だけが境内と杉並、美春を照らしていた。

セミの鳴き声が耳に響く。

杉並は黙ったまま境内に立ち、腕に目をやった。

腕時計で時間を確認しているのだろう。

脇には、やはり大きな茶封筒がある。

（やっぱり誰かと待ち合わせをしてる、のかな…？）

美春に見張られながら、杉並は境内も抜け、林の中に入って行った。セミの鳴き声がけたたましさを増す。

林の外が暑すぎるせいもあるだろうが、中は光が遮断され涼しくらいに感じられた。

木々の匂いが鼻につく。

美春はふうと短く息を吐いた。

緑色には癒しの効果があると、誰かの言った言葉を思い出す。

杉並は足を止め、そして相手を見つけると、大きな声でその名を呼

んだ。

相手は声に反応し、ゆっくりと首をあげた。

真っ白い毛、顎に称えた髭、細いが逞しい足、そして 首には
立派な鈴。

美春は大声で叫びかけた。

ヤギですかあつ！？ と。

啞然とする美春を他所に、杉並は茶封筒から数枚の葉を取り出した。
ヤギは葉を見ると、メエーと一声あげ、黙々と葉を口にした。

杉並は満足げな笑みを浮かべ。

喜んでいただけたようで何よりです、と言った。

数分の後、ヤギは全ての葉を食べ終え、再びメエーと鳴いてから、
杉並の前を去っていった。

ヤギの背を見送りながら、杉並はピシリと敬礼をした。

やがてヤギの姿が林の向こうに消えると、杉並は敬礼を解き、じゃあ帰るか、とすっかり大きな仕事をやり終えたかのような口調で言った。

まだ放心状態の続く美春の視線から、杉並はどんどん遠ざかっていく。

美春はハツとし、思わず草陰から飛び出した。

「ま、待ってくださいー!!」

「わんこ嬢。どうした？こんなところで」

セリフ程は驚いた様子もなく、杉並は美春に向く。

逆に美春の方が驚いているくらいだ。

どうした？と問われたことは美春にとってチャンスであろう。

杉並の怪し過ぎる行動は昼間からずっと見続けてきた。

問い詰めるべきところはたくさんある。

しかし、たくさんありすぎて、どこから突っ込むべきか分からない、というのも美春にとっては真実であった。

今日一日のことを思い出せば思い出すほど、頭がパンクしそうになっ
てくる。

そんな中で美春がやっと尋ねられたのは、

「さっきのヤギは一体何なんですか？」

の一つだった。

加えて杉並も杉並で、少しの躊躇もなく当たり前のように、こう答えた。

「俺の上官だ」

「……………はあ？」

返事を受けてから、美春は始めて自分の質問を後悔した。
そして改めて問い直す。

「じゃあ、その上官さんと杉並先輩は」

「ほら」

「…はい？」

どこから取り出したのか、突然目の前にアイスクャンディーを差し出されて、美春は上半身を少々引かせた。

これもまた風紀委員という肩書きがそうさせるのか、その薄黄色のアイスクャンディーの実体を疑ってみるが、やはり分からない。

ただ、何となく。

（何となく、美春はこのアイスクャンディーを物凄く食べたい）

杉並は何ともなさげに、アイスクャンディーを軽く振りながら言う。
「やるよ。今日はだいぶ振り回されてもらったことだしな。…」

ちなみにバナナ味だ」

「バナナ！？わあっ、ありがとうございます！さっそく頂きますね！」

バナナ。

その一言が聞こえると、美春は全てを聞かぬうちに、アイスクャンディーを受け取り、口に頬張った。

美春の全神経がアイスクャンディーへと注がれていた。

「むぐむぐ…バナナ味のアイスなんて、まさに夏の風物詩ですよねぇ…って、そうじゃなくて…！」

半分食べかけたところで、はたと顔をあげる美春。

目の前にいたはずの杉並の姿が消えているのは、お約束だろう。

慌てて周りをきよるきよる見渡すが、杉並はやはり見当たらない。

美春はがっくりと肩を落とした。

「…逃げられてしまいましたね…」

セミの鳴き声が虚しく感じられた。

先刻の杉並との会話を思い出し、更に突っ込みどころが増えたような気もした。

何の前触れもなく、弱々しい夏の風が通っていった。

「あ…」

片手に握ったバナナ味のアイスクャンディー。

美春はその存在を思い出した。

ぱくりと再び頬張ると、バナナの味が口中に広がった。

美春の顔がふっと綻んだ。

（ま、いつか。杉並先輩も悪いことをしようとしているわけじゃないみたいだし、バナナ味のアイスも頂いちゃったし、今回はこれでもいいよね）

そんな、美春のある夏の日の出来事。

（後書き）

過去作を微修正して投稿。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341n/>

ある夏の日の出来事

2010年10月22日00時46分発行